

検索誘導性忘却効果と 感情的自伝的記憶との関連 —感情価と感情ごとの 想起数に着目して—¹⁾

蘇 心寧*・兵藤宗吉**

Intercorrelations Between RIF and Emotional Autobiographical Memory —Focusing on Emotional Valence and the Number of Recalls for Each Emo- tion—

Xinning SU* and Muneyoshi HYODO**

It has been suggested that memory inhibition underlying retrieval-induced forgetting (RIF) plays a key role in preventing the retrieval of negative autobiographical memories. In present study, we focused on individual differences in RIF and in autobiographical memory performance. A negative correlation was found between RIF and the number of negative events recalled, while a positive correlation was found between RIF and the emotional valence of autobiographical memory. These results indicate that those with the high RIF effect forget negative memory and recall more positive memory. Based on these findings, it suggests that memory inhibition plays a crucial role in emotion regulation.

key words: retrieval-induced forgetting, autobiographical memory, memory inhibition

問 題

一般的には、記憶機能が低下することによって忘却が生じると考えられているが、忘却は必ずしも記憶の失敗を反映しているわけではない。Anderson, Bjork, & Bjork (2000) の研究では、特定の情報の検索練習によって、関連のある情報を思い出しにくくなる検索誘導性忘却 (Retrieval-Induced Forgetting: 以下, RIF) が示された。この結果から、目標を記憶する能力は少なくとも部分的には、非目標を抑制すること、つまり非目標の忘却によって決定されると主張されて

いた。

近年, RIF と記憶の感情側面についても検討が行われている。Groom & Sterkaj (2010) の研究では、感情障害を持つ人、例えば抑うつ者は一般人よりも RIF 効果が生じなかったことが示され、RIF が抑うつ気分に関する望まない記憶の想起に関与する可能性があるとして唆されている。Storm & Jobe (2012) の研究では、抑うつ傾向が高い人を除外して、RIF 効果の得点とネガティブな過去の自己に関わる出来事、いわゆるネガティブな自伝的記憶の想起数に負の相関が示された。この結果によって、Storm & Jobe (2012) は RIF で反映された記憶抑制は、手がかりによって記憶を想起するときにネガティブな出来事の活性化を防ぐと考えられる。しかし、Storm & Jobe (2012) では、参加者は中立手がかりに対して、実験者によって指定された感情価の出来事を想起した。そのため想起する出来事の感情価が指定されているという点で、日常生活で行われる出来事の想起とは異なる。これに対して、蘇・兵藤 (2019) では、中立手がかりの呈示後、自由に出来事を想起させる手続きを用いて検討した。その結果、RIF 効果と自伝的記憶の感情価に正の相関がみられたが、Storm & Jobe (2012) の結果と違い、RIF 効果とネガティブな記憶の想起数との相関が認められなかった。また、中立的な記憶の想起数が感情的な記憶、いわゆるポジティブもしくはネガティブな記憶の想起数よりも多かったため、蘇・兵藤 (2019) の結果は中立的な記憶の想起に影響されたと考えられる。

そこで、中立的な記憶の影響を抑えるために、本研究では、中立手がかりの呈示後、参加者に感情記憶を想起させるよう求めたことで、RIF 効果と感情的自伝的記憶との関連を検討する。この手続きによって、中立的な記憶が感情的な記憶より少なく想起されると想定した。

方 法

実験参加者

大学生 62 名 (男性 29 名, 平均年齢 19.44 歳) であった。

材料作成

RIF 課題の刺激材料は、月元・川口 (2004) の刺激を参考に作成された。自伝的記憶課題の刺激材料は、五島・太田 (2001) の調査から得点が 3.53 から 4.13 までの 20 個の中立語を選出した (7 件法, M (中立語) = 3.85)。

手続き

実験は RIF 課題、自伝的記憶課題と抑うつ測定との 3 つから構成された。RIF 課題では、参加者は最初の学習段階でランダムに呈示されるカテゴリ・項目の対連合 (例: 菓子・ヨウカン; 魚・マグロ) を覚えるよう求められた。参加者が覚え次第、スペースキーを押すと次の対連合の呈示に進むようになっていた。1 つの対連合の最長呈示時間は 5 秒であった。次の検索練習段階で、参加者は学習段階の半分のカテゴリ・新たな項目の頭二文字 (例: 菓子・カス〇〇) の呈示によって項目を完成するよう求められた。参加者が完成し次第、スペースキーを押すと次の対連合に進むようになっていた。1 つの対連合はランダムに 3 回呈示され、1 回の最長呈示時間は 5 秒であった。最後のテスト段階で、参加者はランダムに 5 秒間呈示されるカテゴリ・項目の頭一文字 (例: 菓子・ヨ; 魚・マ) によって学習段階の対連合を可能な限り正確に再生するよう求められた。ここで、検索練習段階で呈示された刺激と関連のある刺激語 (例: 菓子・ヨ) は抑制対象 (Rp-) にされ、関連のない刺激語 (例: 魚・マ) はベースライン (Nrp) にされた。自伝的記憶課題では、参加者はランダムに呈示される 20 個の中立手がかり語に対し、「感情的な自分に関わる記憶」を想起するよう求められた。1 つの出

¹⁾ 本研究にご協力いただきました先生方、論文の審査に際し有益なご指摘を下さいました査読者の先生方に深く感謝いたします。また、論文の作成にあたり、ご指導を賜りました先生方、ご助言をくださいました中央大学ライティング・ラボのチュータ方に心よりお礼申し上げます。

* 中央大学文学研究科
Graduate School of Letters, Chuo University, 742-1 Higashinakano Hachioji-shi, Tokyo 192-0393 Japan.

** 中央大学文学部

Faculty of Letters, Chuo University, 742-1 Higashinakano Hachioji-shi, Tokyo 192-0393 Japan.

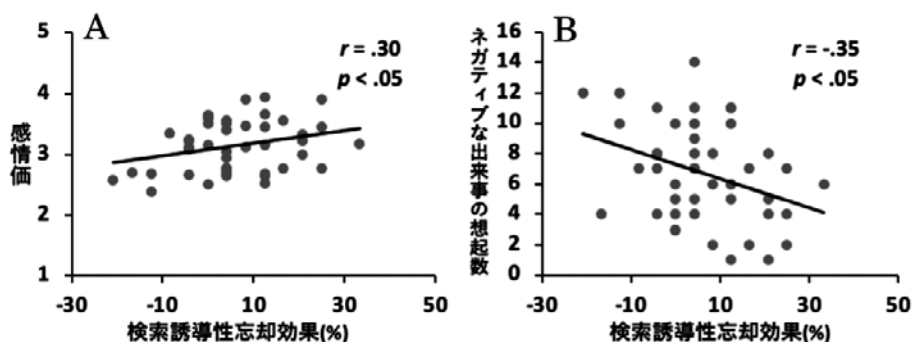


Figure 1 抑うつ低群における相関関係

来事を想起した直後に想起用紙に1文程度で記入し、5件法(1とてもネガティブ～5とてもポジティブ)で感情を評価するよう求められた。最後の抑うつ測定は日本語版のBDI-II(小嶋・古川, 2003)で測定された。

結 果

BDI-IIの得点が14点未満の参加者(45名)を抑うつ低群とし、14点以上の参加者(17名)を抑うつ高群とした。抑うつ低群ではRp-項目の再生率(51.30%)がNrp項目(57.59%)より有意に低かった($t(44) = 3.58, p < .001, d = 0.53$)。抑うつ高群では(Rp: 52.45%; Nrp: 55.39%)有意差がみられなかった($p = .37$)。つまり抑うつ低群のみRIF効果が生じたことがわかった。次に、抑うつ低群には、感情ごとの想起数に対して1要因3水準の分散分析を行った。Holm法で多重比較の結果、中立的な出来事の想起数($M = 3.49, SE = 0.35$)がポジティブ($M = 7.00, SE = 0.40$)とネガティブ($M = 6.69, SE = 0.48$)より有意に少なかった($ps < .01$)。最後には、先行研究(Storm & Jobe, 2012)にならない、抑うつ低群に対して、RIF効果[(Nrp-(Rp-)]と記憶の感情価および感情ごとの出来事の想起数と相関を分析した。結果、RIF効果と出来事の感情価に正の相関($r = .30, p < .05$)があり(Figure 1A)、ネガティブな出来事の想起数に負の相関($r = -.35, p < .05$)があった(Figure 1B)。他の相関関係が認められなかった。

考 察

本研究は感情ごとの想起数と感情価に着目して、RIF効果と感情的自伝的記憶との関連を検討した。まず、中立的な出来事の想起数が感情的な出来事の想起数よりも少なかったことから、本研究では、中立的な記憶の影響を抑えたと考えられる。次に、RIF効果とネガティブな出来事の想起数に負の相関が示された。つまり中立的な記憶の影響を抑えた上で、感情価を限定せずに想起された感情的自伝的記憶においても、Storm & Jobe (2012)と同様の結果と改めて示された。さらに、RIF効果と想起する記憶の感情価に正の関連がみられたことから、事前に感情価を限定せずに参加者が自由に感情的自伝的記憶を想起するならば、RIF効果が高い人はよりポジティブな記憶を想起することが示された。この結果は蘇・兵藤(2019)の結果を支持した。まとめとして、本研究からRIF効果が高い人は、感情的自伝的記憶を検索する時、ネガティブな出来事を少なく想起したことで、想起した記憶がポジティブになると示された。自伝的記憶の検索は自己イメージや信念と一致するポジティブな情報が優先されると考

えられる(Conway, 2005)。そして、本研究からRIFで反映された記憶抑制は、手がかりによって自伝的記憶を検索するときにネガティブな出来事の不起りによって、ポジティブな出来事の優先を維持および促進することに関与すると考えられる。つまりRIFで反映された記憶抑制が感情調節と関連することが示唆された。

近年、いくつかの展望論文では、記憶抑制は感情調節において重要な役割を担うことが提案されている(Norby, 2018; Engen & Anderson, 2018)。こうした課題を今後の研究でさらに実証することが期待される。

引用文献

- Anderson, M. C., Bjork, E. L., & Bjork, R. A. (2000). Retrieval-induced forgetting: Evidence for a recall-specific mechanism. *Psychonomic bulletin & review*, *7* (3), 522-530.
- Conway, M. A. (2005). Memory and the self. *Journal of memory and language*, *53* (4), 594-628.
- Engen, H. G., & Anderson, M. C. (2018). Memory control: A fundamental mechanism of emotion regulation. *Trends in Cognitive Sciences*, *22* (11), 982-995.
- Groome, D., & Sterkaj, F. (2010). Retrieval-induced forgetting and clinical depression. *Cognition and Emotion*, *24* (1), 63-70.
- Norby, S. (2018). Forgetting and emotion regulation in mental health, anxiety and depression. *Memory*, *26* (3), 342-363.
- Storm, B. C., & Jobe, T. A. (2012). Retrieval-induced forgetting predicts failure to recall negative autobiographical memories. *Psychological Science*, *23* (11), 1356-1363.
- 五島史子・太田信夫 (2001). 漢字二字熟語における感情価の調査 筑波大学心理学研究, *23*, 45-52.
- 小嶋雅代・古川壽亮 (2003). 日本版BDI-IIベック抑うつ質問票手引き 日本文化科学社.
- 蘇 心寧・兵藤宗吉 (2019). 検索誘導性忘却効果と自伝的記憶想起内容の感情価の関連 日本認知心理学会 第17回大会発表論文集, 55.
- 月元 敬・川口 潤 (2004). 検索誘導性忘却における抑制の所在—顕在・潜在記憶パラダイムによる検討 心理学研究, *75* (2), 125-133.

(受稿: 2020.10.1; 受理: 2021.3.1)